

愍念寺本堂

構造形式 桁行15.99メートル、梁間13.87メートル、一重、
入母屋造、妻入、銅板葺（元茅葺）、向拝一間、外陣三方縁庇、
内陣三方庇付属、棧瓦葺

建立年代 江戸中期（18世紀前期）

愍念寺の前身は白智山八島寺の一坊（天台宗）であったが、僧教西は本願寺実如に帰依し、文亀元年（1501）浄土真宗に改宗して一字を建立、平等山愍念寺と称した。その後、元和5年（1619）に寺地を現在地に移し再建したと伝える。

本堂の建立年代について明確な資料はないが、向拝の虹梁彫刻の様式が江戸中期の特徴を示し、この頃に本堂は完成したと考えられる。

本堂は間口五間に対し奥行が長い（約七間）妻入の平面。柱は面取り角柱、屋根は入母屋造の茅葺に見せかけた銅板葺（当初は茅葺）として地方の民家に近い外観を示す。

正面には一間の向拝が付く。向拝の柱上は虹梁を架け大斗・絵様肘木を組み、中備に墓股を置いて寺院風に造る。

内部は外陣と内陣に分かれる。外陣は中央に4本の角柱を立て柱間に胴差を入れ、天井上の小屋梁を直接受ける。外陣は間仕切りのない一室として畳（51畳、注1）を敷きつめ、天井は竿縁天井に造られ惣道場を思わせる簡素な構成である。

外陣の簡素に対して内陣は派手な意匠になっている。内外陣境は金障子に欄間は金箔の彫刻を飾り、内陣中央には丸柱の来迎壁に須弥壇を構え、漆塗りに金箔を押した華やかさである。

このように内陣が派手になったのは、文化7年（1810）の改造修理によるものである（注2）。当時、一般末寺において「三つ並び仏壇」形式から、来迎壁に須弥壇を構えた「後門」式に改造することが普及した（注3）。

後門式に改造するには来迎壁を設ける関係から内陣の奥行を大きくする必要があった。柱などの痕跡を調べると、内外陣境は半間外陣側に広げ、背面も柱

筋を半間後退して奥行を約一間（5尺7寸5分）大きくしていることが判明した（注4）。これによって当初の内陣は、奥行が一間（約8尺9寸）と浅く、背面側を三間に間仕切り床式の三つ並び仏壇形式であった（注5）。

余間においても両側面を各一間拡張し、床の高さを内陣と同じ高さに上げた（注6）。

屋根は明治14年（1881）の修理棟札（写し）に茅葺から棧瓦葺に変更したと記す（注7）。この修理によって、小屋組は茅葺に適した屋根勾配の強い扱首組から勾配をゆるくした和小屋に変わった（注8）。

平成17年に行われた解体修理では、当初が茅葺であったことが判明し、棧瓦葺から茅葺屋根に見せかけた銅板葺（注9）に変更された。

本堂は江戸中期の一般末寺の素朴で簡素に構成された外陣がそのまま残る。内陣についても、文化頃に普及した三つ並びに仏壇から後門式への改造経過を知ると共に、今後において部材に残る痕跡から当初の内陣形式の復原は可能である。奥行の長い平面に妻入、茅葺（防災上から銅板葺）の惣道場から発展した本堂の過程を知る上で貴重な建物である。

（注1）外陣の柱間寸法は畳割り（6尺3寸×3尺1寸5分）から算出。内陣は板張りであるので畳寸法に合わない。

（注2）明治14年の棟札（写し）に文化7年に内陣修理の記述がある。

（注3）この頃、本山の内陣にならい須弥壇を設け仏像を安置する後門式が普及する。

（注4）小屋梁の下に内外陣境の柱頂部が切断されたまま残っている。

（注5）背面中央間は後門式により通路となっているが、対面する柱には仏壇框の仕口痕がある。

（注6）寺蔵記録に床を内陣と一斉にしたとあり、柱にも外陣と同じ高さであったことを示す床板仕口痕がある。

（注7）明治14年の棟札写しに、従来は茅葺であったが雨漏れによって損害があったので総瓦葺に変更したとある。

（注8）小屋梁の端に、扱首の足元（細く削る）を固定する丸い穴を発見。

（注9）防災上から茅葺は不可能である。

愍 念 寺 関 係 年 表

年号	西 曆	記 事	資 料
		もと白智山の一坊（天台宗）であった	寺蔵記録
文亀 元	1501	改宗して平等山愍念寺と称し一字を建立 教西を開祖とする	寺蔵記録
慶長 9	1604	御本尊阿弥陀如来立像に裏書	寺蔵記録
元和 5	1619	現在地に再建 祖師聖人絵像に元和五年の裏書	寺蔵記録
寛文 2	1662	前表門再建	寺蔵記録
享保 ～延享	1716 ～1747	18世紀前期 この頃現在の本堂建立か	建築様式
延享 5	1748	前鐘撞堂修理	寺蔵記録
文化 4	1807	前鐘楼上棟 大工針村千蔵	寺蔵記録
文化 7	1810	本堂大修理	寺蔵記録
文政 7	1824	前庫裏再建	寺蔵記録
明治14	1881	本堂修理 茅葺から瓦葺に変更 大工当村、内林紋治	棟札写し
明治31	1898	前表門修理	寺蔵記録
明治32	1899	前庫裏座敷修理	寺蔵記録

明治十四年棟札写し

天下和順

起立未詳再建元和五^戌未^{正月}

日月清明

本堂修覆總瓦葺明治十四^庚午^年

災□不起

八月十五日遷佛式執行^訖

國豊民安

現住 當山第十六代大澤靈測

檀中総代 内林仁兵衛 小嶋茂吉

同源蔵 同文三良 同源太良

立入金兵衛 同弥吉

大工 當村内林紋治

裏書再建ヨリ後百八十餘年経テ文化七^庚午^年正月當山第十一代住職

義圓非常丹誠ヲ抽テテ内陣ヨリ四面ノ庇椽前拝等ニ至ルマテ修覆ナストイヘ

トモ從來茅葺ニシテ風雨ノ為メニ動モスレハ雨洩レ大井ニ損害ヲ致ス依テ

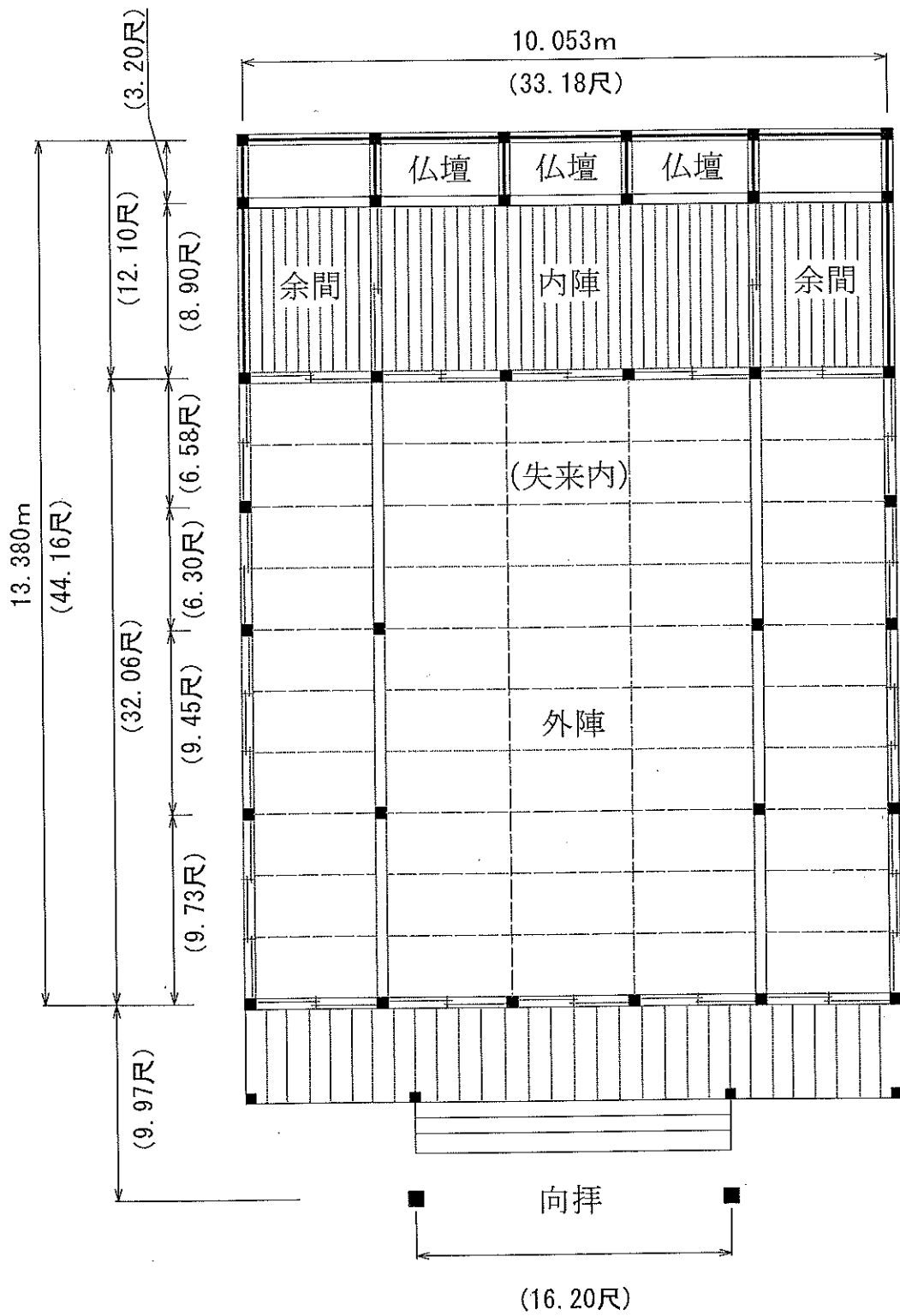
現住靈測前住父靈鳳ト相ヒ議シ法ヲ企テ加膽人内林仁兵衛小嶋茂吉等ヲ

引キ連レ加入者ノ懇志ヲ以テ總瓦葺トス遷佛會ハ明治十四^辛巳^曆八月^中ノ

五日執行シ訖メ

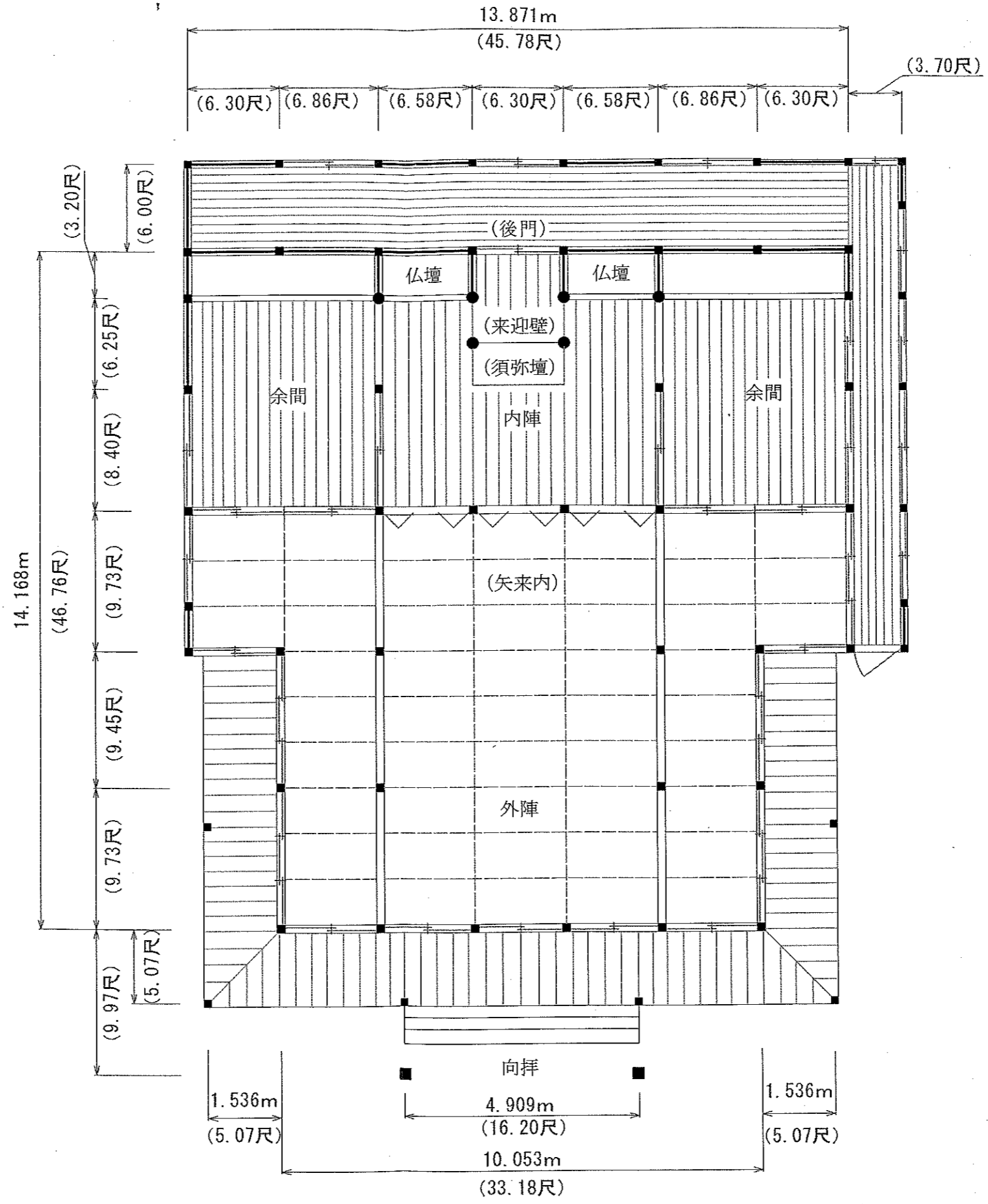
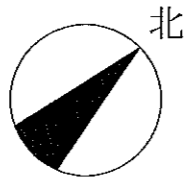
注 元和五年の干支は己未であり、

明治十四年は辛巳である。写し間違いか。



当初推定平面図

縮尺1/100



愍念寺本堂平面図

縮尺1/100